

## 明初の雲貴対策

小林 隆 夫

### 一 はじめに

朱元璋は、元末の諸叛乱を討平し、一三六八年、明王朝を建設して元朝を漠北に駆逐した。これ以後、西南少数民族居住地域も、明の支配領域の中に包摂されることとなるのであるが、西南少数民族は各地の有力者<sup>1)</sup>土酋のもとに自律的秩序を形成していた。そのため明朝は、これら諸地域を支配するにあたって、支配基盤の整備及び地域の実情に応じた政策の実施を余儀なくされるのである。とりわけ雲南は、僻遠の地であるとともに、明に征服される洪武一四〇五年まで元の遺臣梁王の支配が行われており、かつその居住者の圧倒的多数が少数民族によって占められていた<sup>(1)</sup>ということなどから考えると、支配の困難性が予測され

るのである。

本稿では、明初の雲南征服にともなう少数民族対策中の貴州水西宣慰使司を含む、雲貴川交界地域への対策と、麓川軍民宣慰使司が勢力を有した雲南西南方地域への対策とをとりあげ、そのちがいを明らかにしてみたい。

### 二 明初の貴州対策

至正二三（一三六三）年七月、鄱陽湖の戦いで湖広に拠った陳友諒に勝利をおさめた朱元璋のもとには、各地の少数民族が来帰するようになった。この動向の中で、貴州東部の思州・思南の土官も来帰している。これについて『太祖實錄』卷一六、乙巳（一三六五）年六月己丑の條には、

置思南宣慰使司。思南宣慰使田仁智、遣其都事楊琛來  
 歸。

とあり、同年七月乙丑の條には、

元思州宣撫使兼湖廣行省左丞田仁厚、遣其都事林憲萬  
 戶張思恩、來獻鎮沅古州軍民二府婺川印水常寧等十  
 龍泉瑞溪沿河等三十四州。皆其所守地也。於是命改宣  
 撫司爲思南鎮西等處宣慰使司、以仁厚爲宣慰使。

と記されており、田仁智及び田仁厚の來歸を知ることがで  
 きる。

しかし、貴州において思南・思州の如く早期に朱元璋の  
 もとに來歸した土官は特異な例で、多くは洪武年間に入っ  
 てからである。『明史』地理志及び『太祖實錄』によつて  
 土司の設置年代を記すと以下のようになる。

乙巳（一三六五） 思南宣慰使司、思州宣慰使司  
 洪武二年（一三六九） 鎮遠溪洞金容金蓮蠻夷長官司  
 洪武三年（一三七〇） 潭溪蠻夷長官司、古州蠻夷長官  
 司、新化蠻夷長官司、湖耳蠻夷長官司、亮寨蠻夷長  
 官司、歐陽蠻夷長官司  
 洪武四年（一三七二） 頂營長官司、新添長官司  
 洪武五年（一三七二） 貴竹長官司、金筑長官司、程番  
 長官司、中曹蠻夷長官司、方番長官司、臥龍長官司、  
 龍里長官司、金石番長官司、大龍番長官司、底寨長

官司、羅番長官司、木瓜長官司、乖西蠻夷長官司、  
 貴州宣慰使司、養龍坑長官司、水東長官司、八舟蠻  
 夷長官司、偏橋長官司、施秉蠻夷長官司、施溪長官  
 司、團羅長官司、得民長官司、曉隘長官司、陂帶長  
 官司、印水長官司  
 洪武六年（一三七三） 小程番長官司、盧番長官司、洪  
 番長官司、小龍番長官司、盧山長官司、都坪義興溪  
 蠻夷長官司

洪武七年（一三七四） 麻嚮長官司、大華長官司、沿河  
 佑溪長官司、平頭著可長官司、龍泉坪長官司、朗溪  
 蠻夷長官司、厥柵蠻夷長官司、苗民長官司、蠻夷長  
 官司、黃平安撫司  
 洪武一五年（一三八二） 上馬橋長官司、小平伐長官司、  
 把平寨長官司、韋番長官司  
 洪武一六年（一三八三） 都勻長官司、邦水長官司、平浪  
 長官司、平州六洞長官司、九名九姓獨山長官司、合  
 江州陳蒙爛土長官司  
 洪武一七年（一三八四） 餘慶長官司、草塘安撫司  
 洪武一九年（一三八六） 募役長官司、都勻安撫司、  
 寧谷寨長官司、大平伐長官司、康佐長官司、西堡長  
 官司、十二營長官司  
 洪武二二年（一三八九） 平定長官司、清平長官司、臻

剖長官司、六洞長官司、橫坡長官司

洪武二年（一三九〇） 豐寧長官司

洪武四年（一三九一） 樂平長官司

洪武五年（一三九二） 龍里蠻夷長官司

洪武三〇年（一三九七） 丹行長官司、丹平長官司

年代不明 雍水安撫司、楊義長官司、省溪長官司、提

溪長官司、大萬山長官司、烏羅長官司、石旰長官司、

葛彩葛商長官司、銅仁長官司、洪州泊里蠻夷長官司、

曹滴洞蠻夷長官司、西山陽洞蠻夷長官司、中林驗洞

蠻夷長官司、福祿永從蠻夷長官司、水德江長官司

これよりうかがえることは、洪武五年以降土司の設置が  
 急増していること、一一一四年の四年間は設置がないこと、  
 一五年以降また設置されていることなどである。このこと  
 から、四川に拠った明昇討伐及び洪武一四年一五年の雲南  
 討伐が、明の貴州に対する勢力拡大の契機となっているこ  
 とを知りうる。土司の設置だけでなく、行政組織・軍事組  
 織についてみると、洪武一五年正月に貴州都指揮使司が設  
 置されているのに対し、布政使司の設置は永樂一二年二月  
 となっている。また貴州都指揮使司のもとに組織されてい  
 た衛の設置も洪武四年の貴州衛の設置以外は、洪武一五年  
 以降となっており、ここでも雲南征服との関連を指摘しう  
 るのである。

ところで、貴州西部より雲南東部にいたる広範な地域を  
 勢力範囲としていたのは貴州宣慰使霽翠である。田汝成

『炎微紀聞』卷三、奢香伝には、

奢香者貴州宣慰使霽翠之妻也。霽翠之先火濟者、蜀漢  
 時左丞相亮刊山通道、擒孟獲有功、封羅甸國王。唐阿  
 珮・宋普貴・元阿晝皆以歷代開國時、納土襲爵、居水  
 西號大鬼主。霽翠仕元四川行省左丞兼順元宣慰使。洪  
 武四年與其同知宋欽歸附。高皇帝嘉之、以霽翠爲貴州  
 宣慰使、欽爲宣慰同知、得各統所部。而霽翠兵獨強盛。  
 とみえており、霽翠の先祖は三國蜀漢の諸葛孔明を助けて  
 羅甸國王に封じられてから、代々水西に居し、支配者とし  
 て君臨していたことを知る。また『讀史方輿紀要』卷一二  
 一、貴陽軍民府の條には

貴陽滇南之門戶。欲得滇南、未有不先從事貴陽。自滇  
 南而東出貴陽。其必爭之地也。蓋應援要途控臨重地矣。  
 とみえ、貴州宣慰使司のおかれていた貴陽の地理的重要性  
 を指摘している。また『太祖實錄』卷一九二、洪武二二年  
 七月丁酉の條には、

丁酉。遣使齎勅諭征南將軍穎國公傅友德等曰。東川芒  
 部諸夷、種類雖異、而其始皆出於囉囉。厥後子姓蕃衍  
 各立疆場。乃異其名、曰東川、烏撒、烏蒙、芒部、祿  
 肇、水西。無事則互起爭端、有事則相爲救援。

とあり、東川・烏撒・烏蒙・芒部・祿隆・水西を「出於囉囉」として同一出自のものにとらえている。<sup>(5)</sup>さらにこれら諸地域の土官は互いに婚姻関係を結んでいたとみえ、『明史』卷三十一、四川土司一には

先是、烏撒與永寧、烏蒙、霑益、水西諸土官、境土相連、世戚親厚、既而以各私所親、彼此構禍……

とある。このため、明が雲南支配を行うにあたって、貴州水西宣慰使霑翠が、どのような行動をとるかは非常に重要なものとなってくるのである。すなわち、古くからこの地の支配者として君臨し、強大な武力をもとに雲南への重要拠点を支配下におさめた霑翠の動向は、この地への勢力拡大をはかる明朝にとっても、出自を同じくし、尚かつ婚姻関係を有してきた烏撒・東川等の諸蛮にとっても注目の的であった。

洪武一四年九月、三十万の大軍をもって開始された雲南討伐によって、中慶に拠った梁王パツァワルミと大理の段氏が降服すると、南部的車里、西南部の麓川が帰属し、明は洪武一五年閏二月、雲南全土を支配下におさめることとなった。ところが、『太祖實錄』卷一四四、洪武一五年四月己亥の條に、

己亥。吉安侯陸仲亨遣使馳奏。烏撒諸蠻復叛。上勅諭征南將軍潁川侯傅友德・左副將軍永昌侯藍玉・右副將

軍西平侯沐英曰、烏撒諸蠻伺官軍散處、大勢不合、故有此變。

とある如く、烏撒で叛乱が発生する。叛乱には、烏撒・烏蒙・東川・芒部の諸蠻が結集、同年七月まで続いたが、傅友德・沐英等によって討平された。また洪武一五年四月の條には、

（是月）西堡蠻賊寇普定。貴州衛指揮同知顧成出兵擊敗之。時征南將軍潁川侯傅友德遣成守普定。會蠻賊一萬五千餘人來攻城甚急。成堅壁不動、徐俟其怠、將兵出北門擊之。賊遂敗走。

とあり、西堡の蠻、一萬五千人が普定を寇している。さらに、九月には土官楊苴のもとに蠻衆二十餘萬が雲南城を攻めたという記事がある。<sup>(7)</sup>こうしてみると雲南西部はもとより、雲南東部から四川・貴州交界地一帯は洪武一五年段階において非常に不安定な状況におかれていたと考えられる。ところで先に記した如く、明に叛乱した烏撒・烏蒙と水西とは婚姻関係を有し、かつ、出自を同じくするというところから「有事則相爲救援」という関係にあった。『弇山堂別集』卷八七、詔令雜考三、洪武一五年八月一九日の勅によると、

近人自七星關來說。芒部・烏撒二處蠻人、晝夜持火照道、挈家盡逃入霑翠地方避難。

水西霑翠地方、必會十萬之上軍數、踏盡了然後方是平定。

とある。すなわち、赤水・畢節・七星関等に衛を立てて防守すれば、雲南への往来が便利となり、また十萬の兵を以って霑翠の地も平定できるとする。この結果洪武一七年に畢節衛、洪武二一年、赤水衛、七星関守禦千戸所がそれぞれ設置されている。一方、懷柔策もとられていく。『炎微紀聞』卷三、奢香伝には、

時都督馬燁鎮守貴州、以殺戮儆羅夷。羅夷畏之、號馬閭王。霑翠死、奢香代立。燁欲盡滅諸羅、郡縣之、會奢香有小罪、當勘。燁械致奢香裸體之、欲以激怒諸羅、爲兵變。諸羅果救欲反。時宋欽亦死。其妻劉氏多智、謂奢香部羅曰。無譁。吾爲汝訴天子。天子不聽、反未晚也。劉氏遂馳、見太祖白事。

とある。都督の馬燁は改土歸流を目的として、霑翠の死を機に奢香をはずかしめ、兵端を開かんとしたことが記されている。この時、馬燁の無法を怒った「諸羅」は叛乱にたとうとするが、水東の貴州宣慰使宋欽の妻劉氏の提案により、太祖への提訴の結果を待つこととなるのである。ついで同書、奢香伝には、

太祖……語高后且曰。朕固知馬燁忠潔、無他腸。第何惜借一人以安一隅也。

とあり、芒部・烏撒の蠻人が、叛乱のため霑翠の地に逃れたのを知りうる。また『太祖實錄』卷一五四、洪武一六年六月己亥のの條には、

己亥。遣勅諭征南將軍潁川侯傅友德……  
：霑翠所屬阿呂・雨宗・碎瓦莫得・阿胡・阿遣等蠻、  
嘗助烏撒殺害官軍者。……

とあり、烏撒の叛乱にさいして霑翠に所屬していた蠻人が、烏撒を助けて明に対抗したことがわかる。このため水西が諸蛮に呼応して起乱する可能性は充分にあり、水西の動向いかんによっては雲南が孤立することもありえた。『明史』卷三十一、貴州土司には、

太祖於平滇詔書言。霑翠之輩、不盡服之、雖有雲南不能守。

と記されている。

そこで明朝は水西宣慰使司をおさえこむために、衛の設置を検討する。『弇山堂別集』卷八七、詔令雜考三、洪武一五年八月二九日の敕諭には、

差去舍人到時、可即將藍玉・費聚・吳復・王・張・郭三都督幾箇領軍的會做一處、搜山殺蠻。軍勢即大、蠻人地方窄狹、可以擒獲、無糧處、休教軍守。止於赤水立一衛、畢節立一衛、七星關立一衛、黑張迤南、瓦店迤北、分中立一衛。如是分布守定、往來雲南便益。其

とみえており、馬燁とひきかえに水西を安定させようとする。もし水西で明への叛乱が発生すれば、それだけでなくも食料に不足をきたし、周囲を敵に少數民族にかこまれていく征討軍は、雲南への通路を断たれ、出口を閉ざされることとなる。朱元璋は、馬燁を罪することによって水西を明にとりこみ、あわせて雲南支配の展望を、この決断により開いたのであった。一方、水西にしてみると、代々婚姻関係にあった烏撒・烏蒙の諸蛮からはなれ、明朝に依存することによって、自己の勢力を保持しようとしたものといえよう。そのことは、『明史』卷三二六、貴州土司に、

十七年。奢香率所屬來朝、并訴驛激變狀、且願効力開西鄙、世世保境。帝悅賜香錦綺珠翠如意冠金環襲衣。而召驛還、罪之。香遂開偏橋水東、以達烏蒙烏撒及容山草塘諸境、立龍場九駅。

とあることから判明する。尚、ここにいる、烏蒙・烏撒等に驛をたてようということが、明朝の懸案となっていたことは、洪武一五年二月と十月の朱元璋の勅諭によって知りうるが、馬燁の事件によってこの件も解決されたのである。

ところで明朝は、『太祖實錄』卷一五一、洪武一六年正月辛未の條に、

以雲南所屬烏撒烏蒙芒部三府隸四川布政使司。

とあるように、烏撒・烏蒙・芒部を四川布政使司のもとにおいた。さらに同書、卷一六二、洪武一七年五月辛丑の條には、

割雲南東川府隸四川布政使司。改烏撒烏蒙芒部爲軍民府、而定其賦稅。

とあり、東川府も四川布政使司のもとにしている。この烏撒・烏蒙・芒部・東川を雲南から四川に改隸した理由について、『天下郡國利病書』第三二冊、烏撒衛志は、

洪武一五年、征南將軍顧川侯傅友德以烏撒烏蒙芒部東川四府地近四川、奏改隸四川布政使司。從之……本衛地方接連雲南通省皆西南夷地。今中國所以能通雲南、享彼貢賦之利者、以有貴州東西兩路耳。洪武間以西路烏撒烏蒙東川芒部四軍民府及東路普安州俱屬雲南。蓋未之深思耳。何也。東路普安州之盤江、西路烏撒之七星關河皆入滇門戶。洪流巨浸、誠一夫當關、萬夫莫開之險。萬一雲南有變、據此二險、是無雲南矣。傅顧川有見。於此奏以四府改隸四川。永樂間又以普安州改隸貴州。是撤雲南之藩籬、啟其門戶、以延中國使節冠蓋矣。此守在四夷之一大端也。原其爲謬、豈一世一世之計哉。

と記している。これによると、普安州盤江、烏撒七星關は「一夫當關、萬夫莫開之險」であり、この二險によること

が雲南控制の要諦であることを知りうる。またそれ故に顧川侯傅友德の奏により烏撒・烏蒙・東川・芒部を雲南より四川に改隸し、普安を貴州に改隸したというのである。こうして明朝は、洪武一六〇七年に雲・貴・川交界地での叛乱を鎮圧するとともに馬燁事件を機に水西宣慰使司を明側にとりこみ、烏撒・烏蒙等とのきりはなしに成功したのである。また烏撒・烏蒙・東川・芒部を四川布政使司のもとに属させることによって、雲南の諸状況に対応しうる体制をもつていったのである。

### 三 麓川の叛乱と屯田政策

明朝は雲南征服・叛乱討伐を行うなかで、軍餉の確保に苦しみ、三十万人の大軍の軍餉は常に不足の状況におかれていた。『太祖實錄』卷一四二、洪武一五年二月乙亥の條には、

上以大軍征南兵食不繼、命戸部令商人往雲南、中納鹽糧以結之。於是戸部奏定商人納米給鹽之例。

とあり、商人に「納米給鹽」を行わせようとしたことが判明する。また同書卷一四三、洪武一五年三月丁丑の條には、丁丑……元司徒平章達里麻等嘗言、元末土田爲僧道及

豪右隱占。今但準元舊則、於歲用有所不足。已督布政司覈實雲南臨安楚雄曲靖普安普定烏撒等衛及霑益盤江等千戸所見儲糧數一十八萬二千有奇、以給軍食、恐有不足。宜以今年府州縣所徵、并故官寺院入官田及土官供輸、鹽商中納、戍兵屯田之入、以給之。上可其奏。とみえる。すなわち雲南・臨安・楚雄・曲靖・普安・普定・烏撒等の衛及び霑益・盤江等千戸所の現儲糧十八万二千石では軍食に足らないので、今年の府州県から徴する税糧を軍食にあてるといふ内容である。この上奏の直後に烏撒等の乱が発生するが、そこに「攻烏撒諸蠻、取糧爲食」という勅諭がもたらされていることは、現地での略奪を認めたとはいえよう。さらに、同書卷一四六、洪武一五年七月己巳の條に、

己巳……近得報知、雲南守禦諸將軍餉不足……然後以東川之兵、駐於七星關之南烏撒之北中、爲一衛。其餉餉則東川之民給之。若烏撒立衛則令烏撒之民給之。或七星關、或烏蒙、或芒部、立一衛、各俾本土之民給之。自永寧以南至七星關中爲一衛、令祿照孛子等蠻給之。皆俾餉餉歲足。

とあるように、立衛した場合には、現地において歳足させようとしている。こうしてみると、叛乱討伐中のこととはいえ、軍餉問題の解決は、略奪も含めて現地での調達にた

よらざるをえなかったことが判明するのである。また『雲南機務抄黄』洪武一六年七月一二日の勅諭には、

假使曲靖所下種子八百餘石、驗種得糧不過收稻八千餘石。止得四千餘米。以守禦軍士、每軍一月約用三斗、給之不滿四月。自八月食新糧起、至十一月終、糧盡矣。欲明年夏麥、尚有六箇月、無糧相接、未審那軍以何充腹。

とあり、『太祖實錄』卷一六三、洪武一七年七月甲寅の條には、

甲寅……先是上謂戶部臣曰。曩爲雲南數生邊費、命將討之。今其地已平、悉入編籍。然兵多民少、糧餉不給……

とみえる。洪武一六〇七年にいたっても軍餉不足の状況は解決されていないのである。そのうえ洪武一八年四月には、麓川平緬軍民宣慰使思倫發が景東に入寇する。このため明は軍餉問題とともに、雲南西南部における叛乱への対応にせまられることとなるのである。

思倫發は洪武一五年閏二月、明朝のもとに帰するのであるが、当時すでに強大な勢力を有していたと思われる。方國瑜の『雲南史料目錄概説』第一冊四七七―九頁に載せられている『麓川思氏譜牒』によると、

思可法在位四年、築城於者關遷居之。又四年、聲名大

抄黄』によると、

該洪武二十一年二月初十日、本府欽都督王誠等於奉天門、早朝欽奉聖旨。右軍差舍人前去播州水西烏撒烏蒙、潞益尋甸建昌武定馬湖各土官處說知、祿肇不肯當差、芒部東川與白夷私通、已差阿奴、亦結暗地往來……とあり、芒部・東川は白夷（麓川）とひそかに通じており、阿奴なる者をつかわして盟約を結び、秘密裡に交渉をもっていたことが判明する。また同書に、

我每行遠路、或每自種自喫着、修營築成家。在東川芒部地面上、請白夷十萬二十萬軍來、東川芒部納與他人糧象馬草糧、與我每戰。俺的差發不當、白夷差發却當。と記されていることから、東川・芒部は麓川のために、人糧等をおさめ、明と戦っていたことがわかる。麓川思倫發の乱は、雲南西南部より四川南部にまで拡大・連動していたのである。

ところで思倫發は、洪武二年正月の馬龍他郎甸での敗北、二年三月の定辺決戦での敗北により、急速に勢力を衰退させていくが、芒部・東川の叛乱は雲南東部へと拡大する。とりわけ越州知州阿資は洪武二年九月に起乱してより洪武二八年正月にいたるまで、断続的に叛乱を継続していく。<sup>(14)</sup>

さて明朝は、麓川の叛乱が、四川南部の芒部・東川の叛

震、天朝及緬甸兩路來攻、不能克、各退去。是時思可法年四十五歲。因天朝及緬甸攻者闌、失敗退去。隣近諸小國聞之、相率稱臣納貢者、曼谷・景線・景老・整邁・整東・景洪・白古諸地。

とあり、思可法（倫發の祖父）の時に、その勢力は雲南西部からビルマ・タイにまで及び、独立した政治秩序を形成していた。また『雲南機務抄黄』洪武一六年六月二十七日の條には、

雲南老人皆說。死可伐地方三十六路、元朝時都設官。後被蠻人專其地、已四十年已。近因雲南大理不和、其蠻又侵楚雄西南邊遠幹威遠一府。梁王無力克復、至今蠻占。

とみえ、元末明初の状況を記している。雲南だけにかぎってみると、元の梁王、大理の段氏とともに雲南を三分するほどの勢力を有していたと考えることができるのである。このため麓川の思氏は、明に帰属したとはいえ、従来の勢力を保持しつづけたのである。

思倫發の景東侵寇の理由は明らかでないが、この戦いにおいて、土官知府俄陶・千戸王昇が戦死し、明は敗北している。しかもこれを機に叛乱は北部へと拡大する。洪武二〇年には劔川州の土酋楊奴の叛乱があり、二一年には四川南部の東川・芒部にまで叛乱は広がっていく。『雲南機務

乱に連動していた洪武二〇―二一年にかけて、雲南各地に屯田を実施していった。『太祖實錄』卷一七八、洪武一九年九月庚申の條に、

庚申、西平侯沐英奏。雲南土地甚廣。而荒蕪居多、宜置屯田、令軍士開耕、以備儲待。上諭戶部臣曰。屯田之政、可以紓民力、足兵食。邊防之計、莫善於此。とみえる如く、屯田策は沐英の建議によったものである。

しかもその目的は「辺防之計」と「兵食」を足らしむることにあつた。この期における雲南への屯田に関する記述を『太祖實錄』より抽出すると、以下の如くである。

洪武二〇年八月癸酉の條

詔景川侯曹震及四川都指揮使司、選精兵二萬五千人、給軍器農具、即雲南品甸之地屯種。

洪武二〇年九月辛巳の條

命西平侯沐英、籍都督朱銘麾下軍士無妻孥者、置營以処之。令謫徒指揮千百戸鎮撫管領、自楚雄至景東每一百里置一營、屯種以備蠻寇。

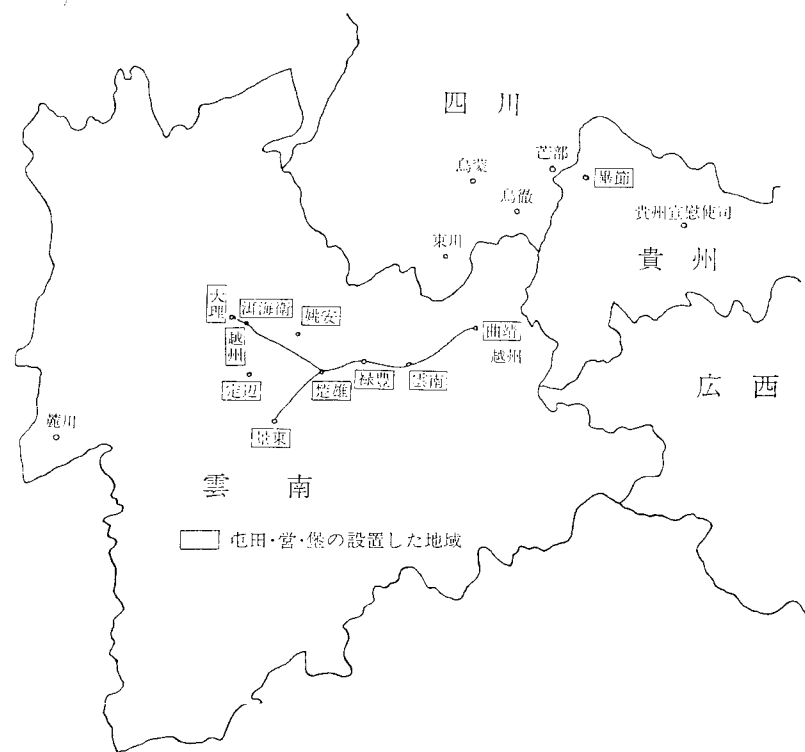
洪武二〇年一〇月丙寅の條

丙寅、長興侯耿炳文率陝西軍三萬三千人、往雲南、屯種聽征。

洪武二〇年十一月壬午の條

壬午、命普定侯陳桓靖寧侯葉昇往雲南、總制諸軍、于

図 I 洪武20、21年にかけての屯田・營・堡の設置



定邊姚安等處、立營屯種、以農隙征進。既又命桓等領兵屯田于畢節等衛。

洪武二〇年一二月丁巳の條

丁巳、遣前城門郎石璧往雲南、諭西平侯沐英等、自永寧至大理、每六十里設一堡、置軍屯田、兼令往來通送以代駝傳。于是自曲靖火勿都至雲南前衛易龍設堡五。自易龍至雲南右衛黑林子設堡三。自黑林子至楚雄祿豐設堡四。自祿豐至洱海衛普湖設堡七。自普湖至大理趙州設堡二。自趙州至德勝關設堡二。人稱便焉。

以上の記述を地図上に略示すると図 I の如くなる。この図より明らかなことは、大理・定邊・景東という麓川への要衝に營・堡や屯田の設置がなされているということである。しかもそれは、烏撒・烏蒙・東川・芒部と麓川との間を切断するかたちとなっている。とすれば、洪武二〇年を境とした時期に、屯田・營・堡が設置された理由として、麓川の雲南侵入に対する防禦、四川南部と麓川との切断などを指摘しうるであろう。またそれ故に「邊防之計、莫善於此」とか、「以俟征討」・「以備蠻寇」等の記述がなされているといえよう。『雲南機務抄黄』には、

独麓川一隅、始則肆侮於金齒。諸將莫不憤惋、欲行勦滅。朕不忍再勞軍士、故不加誅、姑容納款。彼乃弗遵聲教、潛納有罪人爲邊患。朕遂命將帥、沿邊屯種、以

史苑（第四九卷第二号）

鎮邊疆。

と記されており、麓川対策として屯田が設置されたことを知りうる。こうして屯田を開設していった結果、『太祖實錄』洪武二十一年一〇月壬寅の條には、「雲南新附官民軍士田糧馬牛之數」として「田四十三萬四千三十六畝」と記しているが、洪武二五年に、その額は百萬餘畝にも達していた。

こうして麓川蠻の景東攻略にはじまり、四川南部の芒部東川等が呼応した大叛乱は、明朝の雲南における屯田開設を導くところとなった。しかもそれは營・堡の設置や軍屯の実施によって、四川南部と麓川とを分断すると同時に、恒常的軍餉不足の状況をも打開しようとしたものであった。居住民の大多数が少数民族であるという雲南への、こうした軍屯をおしよるの移民政策は、明朝の勢力基盤を形成する上でも重要であったと考える。ともあれ、明朝はこれによって四川南部と麓川を分断し、その勢力を抑え込むことに成功したのである。

#### 四、麓川の衰退と木邦の役割

明に敗れた思倫發は、その予先を八百・緬甸へとむけた。

緬甸王の卜刺浪は、明に使いを遣わし、二度にわたって思倫發の侵寇を訴えた。<sup>(15)</sup>このため朱元璋は、洪武二年二月、李思聰・錢古訓の二人を緬甸及び麓川に派遣した。<sup>(17)</sup>この結果は「由是二國、羅兵和好」とみえる。また思倫發は「臣子見君之禮」<sup>(19)</sup>を行って二人を歓待したという。こうした思倫發の対応は、一方で領土の拡大を意図しているとはいっても、実際には彼の威信低下を反映したものと見える。それを示すかのように李・錢二名が麓川に滞在している間に、部下の刀幹孟が思倫發に叛乱をおこした。<sup>(20)</sup>思倫發は麓川から沐春のもとへのがれ、ついで南京にいたる。<sup>(21)</sup>朱元璋は思倫發を関れみ、沐春を征虜前將軍として刀幹孟を討伐させようとする。一方刀幹孟も沐春をつうじて明への朝貢及び土官の職をうけることを願い出る。明朝という巨大な勢力を中にはさんで、思倫發と刀幹孟との争いが展開されていくのである。『南夷書』はこの問題についての明の対応を、

西平侯以聞。詔命三司議。按察司以爲毋動兵遠路、請棄之。布政司請待其弊而乘之。都司以爲彼既受命爲宣慰。窮而不恤無恩。乱而不治則無威。當爲拔出、然後以兵納之。朝廷是都司議。

と記しており、思倫發を助くべしとする都指揮使史の案が

採用されるところとなった。洪武三十一年五月、西平侯沐春と刀幹孟との間に戦闘が展開され、ついに都督何福に刀幹孟が擒えられたことにより、思倫發の麓川帰還が実現する。しかし思倫發も翌年には世を去った。<sup>(24)</sup>

雲南西部を中心にして周辺の傣族居住地域を支配した麓川平緬軍民宣慰使司も、こうして明との戦争による敗北、内紛による思倫發の逃亡と明軍の力を背景にした麓川への帰還という事実から明らかなように、一挙にその勢力を失っていったのである。永樂帝は、「靖難」の後、麓川の衰退を機に、その支配地を分割し、新たに、府・州・長官司を設置していく。<sup>(25)</sup>洪武三十五年一月には、孟養・木邦・孟定の三府、威遠・鎮沅の二州が設置され、永樂元年正月には、者樂甸・大候・干崖・灣甸・潞江の五長官司が設置された。また永樂四年四月には孟連長官司を新設して雲南都司のもとにおいている。さらに永樂六年四月には促瓦長官司・散金長官司の設置もみられている。これら土司の新設によって麓川平緬軍民宣慰使司の支配領域は、思可發・思倫發の時に形成された広大な領域よりみると、一挙にこれを縮少するところとなった。

明王朝の麓川対策は、その領土分割・新土司の設置にとどまらなかった。木邦府・孟養府は永樂二年六月に軍民宣慰使司となり、麓川平緬軍民宣慰使司と同じ官位を得るの

である。さらに灣甸長官司は灣甸州に、<sup>(26)</sup>鎮沅州は鎮沅府に、<sup>(27)</sup>潞江長官司は潞江安撫司にそれぞれ陸進している。麓川平緬軍民宣慰使司の地を分割して新設した土司の陸進は、相対的に麓川の地位の低下をきたすこととなる。その結果、永樂二年には木邦・孟養による麓川侵入がひきおこされ、<sup>(28)</sup>ついに『太宗實錄』巻八二、永樂六年八月己丑の條に黔國公沐晟言。麓川平緬所隸孟外陶孟土官刀發孟之地、爲頭目刀薛孟侵據。請命宣慰使思行發論刀薛孟、歸所侵地。從之。

とみえる如く、麓川内部における領土争いまでひきおこすことになるのである。

ところで、明の雲南西部及びその周辺支配に重要な役割をはたしたのが、木邦軍民宣慰使司の罕氏であった。洪武三五年十二月、木邦府が設置され、罕的法が知府に任命されると、明の勢力を背景とした活動が展開されていく。

『太宗實錄』巻十九、永樂元年四月甲寅の條には、賜金齒土官百戸汪用鈔一百錠、綵幣四表裏。初麓川平緬宣慰司土官思倫發卒。其頭目罕的法據木邦相仇殺。鎮守雲南西平侯沐晟遣用招安。故賞之。

とあり、麓川と事を構えていた罕的法を招安した状況が記されている。『太宗實錄』巻三〇、永樂二年四月癸未の條には

癸未、麓川平緬緬甸諸宣慰司并木邦孟養府土官、俱遣人來朝貢方物。各賜之鈔幣。時麓川平緬宣慰使司行發所遣頭目刀門賴訢孟養木邦數侵其地。禮部臣言宜以孟養木邦貢使付法司、正其罪。庶蠻夷知懼不敢侵越隣境。上曰蠻夷相攻奪、自昔有之。執一二罪之、未足以革其俗。且事曲直未明。而遽罪其朝貢之使、祇沮遠人嚮化之心。可令西平侯遣人諭之。

とあり、麓川への木邦・孟養の侵攻を記している。永樂帝は「可令西平侯遣人諭之」といっただけで、その他の具体的手段を講じないばかりか、二ヶ月後には、木邦・孟養を軍民宣慰使司へと昇進させている。<sup>(29)</sup>木邦・孟養とも麓川の西方におかれていたため、麓川を明と木邦・孟養とで東西からはさむかたちとなる。以上のような諸状況から考えると、永樂帝は木邦・孟養に麓川牽制の役割をになわせたもののようである。

木邦の役割は、麓川対策にとどまらなかった。永樂二年五月、永樂帝は八百大甸軍民宣慰使司の地を分割して、八百者乃軍民宣慰使司を設置し、使臣として員外郎左洋を派遣する。<sup>(30)</sup>ついで八月、内官楊瑄を孟定・孟養・木邦・麓川・車里・八百・老撾等に派遣するが、八百大甸はこの楊瑄の進路を阻むという行動にでる。この楊瑄阻遏事件に対し、永樂帝は永樂三年七月討伐命令を出す。この命をうけて、

『太宗實錄』卷四九、永樂三年十二月戊辰の條には、戊辰、鎮守雲南西平侯沐晟奏、奉命率師及車里諸宣慰兵、至八百境內、破其猛利石厓及者答二寨、又至整線寨。木邦兵破其江下等十餘寨。八百恐懼、遣人詣軍門、陳詞伏罪。

とあるように、車里・木邦等が八百征討に参加している。このように木邦は東北部の麓川のみならず、南東部の八百大甸に対しても明の意向にそって軍事行動を展開しているのである。木邦はさらに緬甸宣慰使司との間にも事をかまえていく。『太宗實錄』卷九四、永樂七年七月丙申の條には、

木邦軍民宣慰使司宣慰使罕寶發遣頭目陶孟刀不答等四十人、貢象馬金銀器、謝襲職恩。又遣陶孟刀不答等奏曰、緬甸宣慰使那羅塔數誘罕寶發背叛朝廷。罕寶發自念受國厚恩、不敢從逆。己力拒之。若天兵下臨、罕寶發當効微勞。上嘉其忠、遣中官徐亮資勅勞罕寶發曰、朕即位以來、爾父能竭誠効職、恭事朝廷、撫治一方、人咸得所。朕久慕之。今爾能遵父之行恪守臣節。又能力拒那羅塔不義之言、尤見爾之忠誠。那羅塔以冀爾之地懷心不感。朕久聞之、所未忍遽加兵者、恐傷及良善。己遣人諭之、俾改過自新。如仍不悛、即命將出師、由海道來、爾嚴整士馬、由陸路進、小醜不足平也。嘉爾

之誠、特遣中官徐亮、往諭朕意、並賜爾白金三千兩、錦綺二百表裏、爾祖母母妻織金文綺紗羅各五十四。爾其益篤忠誠、以嗣前人休烈、欽哉。

とあり、木邦は緬甸からの叛明の誘いを拒絶したばかりか、永樂帝にその内容を訴え、緬甸討伐の尽力を申し出ているのである。この後、『太宗實錄』卷一四二、永樂十一年八月乙亥の條には、

乙亥、木邦軍民宣慰使罕寶法遣頭目刀不答等、以所獲緬甸土官那羅答象馬諸物來獻。初那羅塔不遵朝命、侵據孟養之地。罕寶法請以夷兵討之。上許之。罕寶法遣頭目刀散孟等、攻破緬甸城寨二十餘處、多所殺獲、并獲其象馬諸物。至是悉獻京師。

とみえており、緬甸の孟養侵襲にさいし、木邦が出兵して緬甸を敗り、その戦利品を明に献じたことが判明する。緬甸の側では、こうした木邦の軍事行動に対して、永樂一二年二月に木邦の侵掠を訴えるが、明は逆に「使脩好鄰境、各守境界」とこれを諭している。

以上の記述からも明らかのように、木邦の周辺諸土司に対する軍事行動は、単に互いの勢力争いとのみ見ることはできない。では明の意向のもとに行われた木邦の軍事行動は、明の雲南支配にとってどのような役割をはたしたのであるうか。

雲南西・南方面に設置された軍民宣慰使司は、それぞれ大勢力を有していたため、より強大化し、領域の拡大をはかって、明の支配領域に侵入するという状況もありえた。

直接的侵入に対しては、衛所の兵によって守らざるを得ないが、より積極的防禦策をとるとすれば、巨大勢力の出現を阻止していくことが必要であった。そのため、大勢力を有した土司の領域を分割し、互いに対立・牽制・抗争させ、ひいてはその勢力を衰弱させていった。<sup>33</sup>また、明の援助のもとに一勢力を創出し、それをもとにして、周辺諸土司にらみをきかせたのである。木邦軍民宣慰使司の設立とその軍事行動は、こうした明の意図のもとに行われたものと考えられる。木邦は、明の出先機関的役割をはたし、明に對し「益篤忠誠」しながら、それを自己の勢力拡大に利用して、一大勢力を形成していくこととなるのである。

## 五、おわりに

本稿においては、雲貴川交界地及び雲南西南方面に対する明初の諸対策を、時間の経過にしたがって通観した。明朝は、衛所の設置・軍屯の導入・行政機構の設置等によって、この地に支配権を及ぼしていこうとするのであるが、各地において自律的秩序を有していた諸民族を支配するに

あたっては、地域の実情及び明朝の支配力の浸透の度合に応じた政策を余儀なくされたのである。

明朝は、雲貴川交界地に対しては、貴州西部に大勢力を有した貴州水西宣慰使司を烏撒・烏蒙・東川・芒部ときりはなし、明朝側にとりこむ政策をとった。水西宣慰使司が、この地の名族として大勢力を有していたにとどまらず、その地理的位置からも雲南支配の成否を決定する程の重要性をもったからに他ならない。それは、流官支配の導入をはかった部將馬燁を処罰するのとひきかえに、貴州西部の安定と驛道の開設とを約束させたことに示されている。流官支配地として不安定な状況におくよりも、水西を明にとりこみ、その支配力によってこの地を安定させたほうが有利であるとの判断にもとづいてなされたものといえよう。

一方、雲南西南部からビルマ・タイにいたる大勢力を有していた麓川に対しては、軍屯によって四川南部との結合を分断するとともに、思倫發の死を機にその領土を分割し、多くの土司を新設して勢力削減をはかっている。また、より積極的に、親明勢力としての木邦を設置し、麓川牽制ならびに、諸土司の反明行動の阻止・軍事討伐にあたらせている。諸土司間に勢力均衡の状況をつくりだし、互いに対立させ、相互に不安定な状況におくことは、辺境地域における巨大勢力の出現を阻止することであり、また明の直接



注

- がうことにする。

- 史苑（第四九卷第二号）

(一九七二年史學專攻修士課程修了・埼玉県立行田高等学校教諭)